では塩酸プロカインが91 5±5 8%まで低下し，塩酸ジブカインは91 2±4 9%まで低下した。拮抗薬ビククリンは51 1±6 0%まで有意に低下した。[^{3}H]フルニトラゼパムの結合量は0 21±0 05pmol／mg，protein（100±2 4%）。拮抗薬フルマゼニールは0 9±1 3%まで低下した。100μMでは塩酸プロカインが63 5±3 6%迄有意に低下し，塩酸ジブカインは60 4±3 3%まで有意に低下した。100μMでビククリンもしくはフルマゼニールと塩酸プロカイン及び塩酸ジブカインを比較すると有意差を認めた。以上から，局所麻酔薬は脳内のＧＡＢＡやＢＺＰ受容体作動物質のＧＡＢＡα受容体・ＢＺＰ受容体複合体への結合を抑制するが，その程度は局所麻酔効力・毒性及び構造の違いによる差が無く，その結合抑制の程度は拮抗薬より少ない事が示唆された。

8．高齢者における咀嚼機能評価法に関する一考察
—篩分法と摂取可能食品アンケート法の関連性について—

越野　寿，平井　敏博，石島　勉
大友　康資，高崎　英仁
（歯科補綴学第一）

【目的】 全部床義歯装着者の咀嚼機能は，術者が装着する義歯の安定性や適合性ばかりではなく，患者自身の有する神経筋制御能力，顎堤形態や唾液の分泌量などの口腔内環境，さらには，患者と術者の意思の疎通の程度や信頼関係などが関与しているため，総合的かつ客観的な評価が必要である。われわれは日常臨床において，摂取可能食品アンケート表を用いて咀嚼機能を評価しているが，今回，本評価法の客観性を確認するために，補綴分野の多くの研究者によって，広く用いられている篩分法による咀嚼機能評価結果との関連を検討したので報告する。

【方法】 補綴学の学理にかなった全部床義歯を装着し，良好な顎堤を有する無歯顎患者20名を被験者として，摂取可能食品アンケート表を用いた「咀嚼スコア」と篩分法による「咀嚼効率」により咀嚼記機能を評価した。なお，義歯の咬頭嵌合位におけるパノラマＸ線写真を用いて算出する顎堤高さ指数により，各被験者の残存顎堤を評価した。

【結果および考察】 咀嚼効率と年齢，咀嚼スコアと年齢との関連を検討した結果，両者共に咀嚼効率の加齢に伴う有意な低下が認められた。篩分法による咀嚼効率と摂取可能食品のアンケート法による咀嚼スコアの相関関係を検討した結果，両者間には有意な相関が認められた。

一般にあらかじめ定めてある摂取食品を全部床義歯装着者に問い，その結果から咀嚼能力を評価する方法は主観的であるとされているが，本研究において，篩分法による咀嚼能力評価との間に有意な相関が認められたことは，摂取食品アンケート表による評価法の有用性を示すものと考える。

【結論】 特別な機器を必要とせず，チェアサイドで使用できるため，疫学調査のような集団レベルにおける検査に利用できる，摂取可能食品アンケート法による咀嚼能力評価法の有効性が示唆された。

9．身体運動に伴うクレンチング発現時の胸鎖乳突筋活動について

横山　雄一[1)]，石島　勉[1)]，平井　敏博[1)]
越野　寿[1)]，市岡　典篤[1)]，太田　勲[2)]
（歯科補綴学第一[1)]，口腔生理[2)]）

目的および方法 胸鎖乳突筋の主たる機能は，頭部の回旋および屈曲といわれている。しかし，この本来の機能とは異なり，咀嚼時やクレンチング時においても咬筋，側頭筋の収縮と同調した筋活動が認められるという報告もあり，胸鎖乳突筋と咬合機能との関連が示唆されている。また，われわれの研究から，身体運動に伴い，無意識下でクレンチングの発現する者が多いことが明らかになっている。しかし，身体運動時の胸鎖乳突筋を含めた顎口腔系の諸筋群の活動様相と下顎位については，未だ十分な検討がなされていない。そこで，顎口腔系に異常